

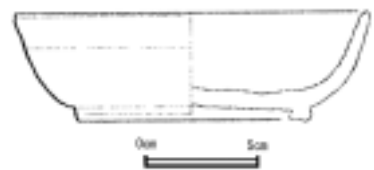
古代沼垂郡の考古学的検討

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/2947

「古代沼垂郡の考古学的検討」

田村 友季子

古代越後国の沼垂郡は、大小の河川が流れ、潟湖や湿地が多数形成された特異な環境で、生産性が低いかわりに、無数の河川を利用し、内水面が非常に発達していたと考えられる。これまで、郡単位の生産と供給というあり方が成立していたと論じられ、このような郡単位の状況を「一郡一窯体制」と呼称した。しかし、笹神・真木山丘陵と、櫛形山脈の二箇所で、須恵器窯跡と製鉄遺跡、官衙遺跡が集中して所在しており、さらにホーロク沢窯跡周辺にも須恵器窯・製鉄遺跡があり、これも含めて考えると、沼垂郡においては、郡より小さな単位で生産・流通体制が整えられていた可能性が高い。さらに、消費地遺跡における、須恵器の流通についても触れ、7～8世紀の、須恵器生産遺跡を中心としたいくつかのまとまりを裏付けられる結果を得ることができた。9世紀に入ると、在地窯は衰退し、この体制は崩壊していく。短期間で、さらに不完全なものであったようだが、沼垂郡においては、確かに「一郷一窯体制」が目指されたものと思われる。



山三賀 遺跡出土 須恵器